

## 泥どろまみれの青春

### プロローグ

昭和二十年十月のはじめに、わたしのいた約千五百人の部隊は、「北満ほくまんで戦場の後片付けあとかたづけと農産物のとり入れの協力をした後に、日本へ帰れ」と命令されて、奉天ほうてん（瀋陽しんよう）を出発した。けれども、やっと着いた北満ほくまんでもそんな指示しじはなく、長い長い旅が続いた。こおって白く光るバイカル湖バイカル湖を過ぎたあたりから、わたしたちは、どこかへ連れていかれるにちがいないと思ひ始めた。

周りにいたソ連兵は、「日本へ帰るのだ」と言い続け、わたしたちもその言葉に

すがりつく思いだったが、もう、望みが持てなくなっていた。

そして十二月の終わりごろ、わたしたちはシベリア中央部のクズバス炭田<sup>⑭</sup>の中に  
ある収容所に着いた。今まで経験<sup>けいけん</sup>したこともない、痛いほどのきびしい寒さがは  
だにつきささった。

この日が、泥沼<sup>どろぬま</sup>のような三年間の始まりだった。

### 収容所の毎日<sup>しゅうようじょ</sup>

収容所<sup>しゅうようじょ</sup>は有刺鉄線<sup>※ゆうしてっせん</sup>と高いへいに囲まれ、いつも見張り役<sup>みはりやく</sup>の兵隊<sup>へいたい</sup>がいた。わたした  
ちの宿舎<sup>しゆくしゃ</sup>はロシア語で「ゼムリヤンカ」と呼ばれ、豚小屋<sup>ぶたごや</sup>のように半分地下<sup>はんぶんちか</sup>にう  
まったひどい湿気<sup>しつげ</sup>の土小屋<sup>つちごや</sup>だった。いつもむせかえるような土<sup>つち</sup>のおいが立ちこめ  
ていた。初めて見たとき、こんな野菜倉庫<sup>やさいくら</sup>のようなところに、人間<sup>にんげん</sup>が生活<sup>せいかつ</sup>できるの

※北満……満州（現在の中国東北部）の北部  
※有刺鉄線……とげのついた鉄線

かとおどろいた。せまい入り口を入ると、通路をはさんで両側に二段の、雑なつくりの板張りのベッドが並んでいて、うすい毛布がたった一枚。みじめなものだった。食事は、燕麦のおかゆの朝食、黒パン一枚きりの昼食、夕食も朝と同じおかゆに具のないスープという内容だった。ほんのわずかなバターが入っていたり、ときどき五グラムほどの砂糖がつくときもあったが、とても人間の食事とはいえないような、栄養のひどく足りないものだった。当然、いつも腹の皮が背中にはりついたままで、腹が空きっぱなしだった。のちに豚小屋のような宿舎はレンガ造りの建物に変わったが、この食事はいつまでたっても良くはならず、飢えはどんどんひどくなり、日本兵はみるみるやせ細っていった。

雪は少なく晴れた日が多かったが、日だまりにいてもすこしも暖かさはなく、太陽さえこおりついてしまったのかと思うほどの寒さだった。空気が、するどくとがった刃物のように鼻につきささる。そまつな宿舎と食事でのりきるには、あまりに

※燕麦……家畜のえさに使われるような麦

も厳きびしいマイナス四十度の寒さだった。

日本でながめていた星はここでは違ちがう方角に見えて、ほんとうに遠い遠い異国いこくへ来てしまった、もう家へ帰ることはできないのだろうか、不安と悲しさでいっぱいだった。

きびしい寒さのなかで、新年を迎むかえた。正月らしきなど何もない元旦がんたんだった。

一月六日ごろ、最初の作業場のタイバー炭坑たんこうへ鉄道引込線※ひきこみせんの工事に出た。まずは予定の場所の雪を取りのぞかなければならない。あまりの寒さに、ほんの五、六分でたえられなくなる。手足の指先が寒さを通り越こして、痛いたくてたまらなくなり、スコップを放りだした。手をこすり足ふみをし、なかには白樺しろかばの小枝こえだを折ってたき火を始めるものもいた。すると、たちまち監督かんとくがとんできて、「何をなまけている！早く仕事をさせろ！」と隊長にかみつくようにどなるのだった。

除雪じよせつが終わると、道床※どうしょうをつくるために、毎日土ほりと土運びが続いた。二月ごろの大地は、地下三メートルくらいまでこおっていて、つるはしをふり下ろすと、

「カチーン」という金属きんぞくをたたくような音がしてはね返ってくる。これにはおどろいた。土ではなく岩そのもののようなようだった。だから一日かかっても、ほんの少ししかほり起こすことができなかった。けれども春先の仕事ははかどった。つるはしで大地を打つと一筋ひとすじのわれめができ、そこへ鉄のくさびを打ちこむと大きな土のかたまりが転がりてできた。腹はらの空すいたことも忘れ、夢中むちゆうでその仕事に取り組んだ日もあった。

それまでわたしたちは、銃剣じゆうけんをかかえた兵隊に見張られながら作業をしていたが、やがてわたしたちのリーダーに任されるようになった。これだけでも、わたしにとつては解放感があった。

五月のはじめ、三十人くらいのグループに分かれて炭坑たんこうの坑内こうない作業に入るようになった。そこは、収容所しゆうようじよから歩いて三十分くらいの丘おかの下にある、センベイ炭坑たんこう

※引込線……石炭の積みおろしなどのために枝分かれした線路  
※道床……鉄道の枕木の下の部分

というおかしな名前のところだった。

地下百二十メートルの地底まで、エレベーターで一直線におりていく。奥へ進むと、岩をけずったあとが荒々しく、初めて見る地底のおそろしさに命がちぢむ思いがした。

まず、トロツコの線路掃除を指示された。それほどきつい仕事ではなかったが、ねむくてたまらない。不思議に思っていると「それは、坑内に流れているガスが原因だ」と教えられた。たしかに、女性労働者がランプを持って坑内を歩き回っていたが、あれはガスを調べるためだったのだろうか。やはり、危険となり合わせにいたのだ。

次の日からは、<sup>\*</sup>トロツコおし。日本兵二人とソ連の労働者二人が組んでひとつのトロツコをおす。平らな線路はよいが、デコボコの所はたいへんだった。ほったばかりの坑道なので、線路はあちこちがゆがみ、うまっていることさえある。ときどき脱線してしまふと、やっとの思いで線路にもどす。一トンの重さのトロツコに、

すべてのエネルギーを使い果たしてその場にへたりこみ、動くこともできなかった。このセンベイ炭坑たんこうでのトロッコおしの仕事は、七月の末ごろまで続いたが、ひどい食事とやせ細った病気の体で、よくもあんな仕事ができただと思う。

八月ごろから地上の作業にもどることになった。今度はクラスノイ炭坑たんこうへの引込線せんの工事だった。土を運んで道床どうしょうをつくり、それをつき固めて砂利じやりなどをしき、その上に枕木まくらぎを並べてレールをしいていくという作業だった。

このときに降ふった真夏の雪わすが忘れられない。その日は朝から肌寒はださむい日で、わたしたちはたき火をしながら作業をしていた。ところが午後の三時ごろ、くもり空からハラハラと雪ふが降りだしたのだ。わたしたちは貨車の下に身をよせ合って「八月といえは日本では海水浴にいくのに……」と言いながら、なまり色の空を見上げていた。もうすぐ二度目の冬がくる。帰りたくて帰りたくて泣きたいほどなのに、まだまだ日本へはもどれそうにもない。

※トロッコ……線路の上を走る四輪の手おし車で、石炭や砂利じりなどを運ぶためのもの

ぼそぼそとした話し声もそのうちに聞こえなくなった。真夏の雪を見上げながら、わたしたちは厳しい寒さがまたおそってくることにおびえ、不安でいっぱいだった。昭和二十二年の正月過ぎから、今度はレンガ工場へ通った。レンガを造って乾かすための建物と、原料の粘土をほる場所、そして焼きがまがある工場だった。交代で朝の八時から二十四時まで働き続けた。途中二十分の休けいがあったが、それ以外はいつも機械に追われる仕事だった。

原料の粘土をほって機械に入れ、ねりあげられて出てきた粘土をレンガの形に切り、かわかし、かまへ詰めるという作業を、すべて人力で行うのである。今であれば、ほとんどがオートメーションでできることだろう。

いちばんつらかったのは、原料の粘土をほる作業だった。粘り気のある土をほり起こすのは、たいへんな力がある。そしてその粘土をトロツコに積むのもたいへんで、とても、長い時間続けて作業することなどできなかつた。あまりの疲れにこしをおろすと、すぐに監督が青すじを立ててどなる。何とか、二、三日ごとに交代し



ながら働いたものだった。

工場内の仕事も機械に追われ続け、勝手に休むことはできない。時間中はずっと歩き回っているの、終わりの合図があると、みんな土間へ足を投げ出してへたりこんだ。

また、かんそう室は石炭をたいした熱氣、けむり、ゴミ、ほこりのすべてがふきこんで、すすだらけのえんとつそのものだった。休けい時間になると、うず高くたまったそのすすの中に、まるで野良ねこのように、よごれもかまわず座りこんだ。もう二度と立てないのではないかと思うほどの疲れだった。だが、二十分が過ぎると、監督はジロリとひとにらみしながら、「ヤポンスキーサルダート、ダワイ、ラボータ（日本兵、さあ、早く仕事にかかれ！）」とわたしたちを追い立ててどなった。捕らわれの身であるあわれさと悲しさで、胸がつまった。

仕事の終わるころには、手も足も真っ黒になったが、すきつ腹でくたくたに疲れきったわたしたちには、よごれなどどうでもよいことだった。

三度のきびしい冬をやつとのことで越した春に、またセンベイ炭坑の作業にもどつた。炭坑の建設は九十パーセントほど終わり、あとは石炭の積みこみ設備と給水塔の建設だった。給水塔は高さ十メートル、直径は三メートルくらいだったと思う。わたしは一輪車でレンガやセメントを運ぶ仕事をしていた。せまい板じきの通路を何度も行つたり来たりするため、手はしびれ、足がだるくなる。勝手に休めばレンガ職人が「ダワイ、ダワイ」とせきたてる。もう、力など残っているはずもなく、毎日が空腹でだるく、暗い世界にひきずりこまれるような思いだった。

こうして炭坑は完成していった。それは、わたしたち千五百人の日本兵の血となみだでつくられたものだといえるだろう。人間らしい生活をうばい、国際社会の取り決めも無視して、わたしたちをおぞましい立場におとし入れ、たくさんの日本兵を死に追いやったソビエト社会主義共和国連邦には、言いたいことが山ほどある。けれども、その相手は今いない。今となつては、すべてがむなしく思える。

「日本へ帰る」という言葉を信じて連れてこられた収容所での、泥沼のような日々をいつたいどう考えればよいのだろう。もう過ぎたことは忘れようと思うこともあるが、人生のうちでいちばんかがやいていたはずの三年間が、まるで泥の中をはいずるような毎日だったことを思うと、するどいトゲのようにわたしの心にひっかかって、痛むのである。

## エピソード

昭和二十二年のいつごろだったのだろうか。わたしは健康診断で三級兵とされて、収容所の炊事場で働くことになった。このとき、別の中隊から石井君という人も入ってきて、新しい二人がペアとなって仕事をした。石井君は口ぐせのように、いつも「はやく家へ帰りたい」と、いつていた。そこでの仕事は三か月くらいだったが、その後は別々になり石井君には会わなくなった。

ところがある日の夕方、「石井君が炭坑で事故死した、遺体は医務室に置かれて

いる」という知らせを聞いて、わたしは医務室いむしつにかけつけた。石井君の遺体いたいは毛布もうふに包まれて、廊下ろうかに横たえてあった。「さわってはいけない」といわれたが、わたしは毛布もうふの上から足のあたりをなでさすった。「石井君、あんなに家へ帰りたいと言いつづけていたのに……」と、心のなかでささやきかけたとき、わたしはあふれるなみだとむせび泣きを止めることができなかつた。今でも石井君の「早く家へ帰りたい」という言葉が、耳の奥おくに残っている。

収容所しゅうようじょでは、たくさんの人が満足な食事もとれずにきびしい労働をさせられ、飢えと寒さに苦しみながら事故じこや病気でなくなつていった。苦しさと悲しみでいっぱいになり、言い表せないほどのうらみを持つ

たまま、遠い異国で死んでいかなければならなかった多くの方々は、いったいどれほどつらかっただろうか。

白樺を次々と切り倒して、増えていった日本兵の墓。冬の月の光に照らされた、死の世界そのもののような光景が、今も目に焼きついてはなれない。

三年間の泥沼のような日々を何とか生きぬいた年の六月に、わたしは幸運にも、この苦界から日本へともどることができた。

今、どうか安らかに……と祈りながら、この泥まみれの三年間の記録を終わりたい。

(原作 藤本善造「泥まみれの軌跡」)